

## 幼稚園・保育園と小学校のスムーズな接続への一考察

### One Consideration about the Good Connection between Preschool-Education and Elementary Education

塩澤 雄一  
Yuichi SHIOZAWA

#### Abstract

There are some nation wide problems that many first graders can not adapt themselves to the new environment, elementary schools, and many classrooms are thrown down into uproars for that reason. The purpose of this study is to research the better educational ways about "self-esteem", "judgments about right from wrong", "communication skills" and "patience" to children in preschool - education and elementary education. So I have analyzed their environments and their mental states.

*Key Words* : self-esteem, judgments about right from wrong, communication skills, patience

キーワード：自尊感情、善悪の判断力、コミュニケーション力、忍耐力

#### I スムーズな接続の阻害要因

小学校に入学したばかりの1年生が、集団行動がとれない、授業中座ってられない、教師の話が聞けないといった状況が全国各地で起きている。いわゆる「小1プロブレム」である。これまでは、課題を持った一部児童がそのような行動を取ることはあっても、継続して集団でそのような状態になることはなかった。ある小学校で、入学したばかりの小学1年生が教師の指示に従わず、教室内を走り回る映像が報道番組で放映され、その後全国の実態が明らかになり、この問題が大きく取り上げられるようになった。

社会状況の変化の中で、子どもの育つ環境や育ちの変化が原因ではないかといわれている。地域社会の崩壊、少子高齢化、核家族化の進行、社会の危険から子どもを守るために大人の管理下に置かれ続ける子ども達、住宅の高層化、テレビやゲームなどの情報機器の進展による子どもの遊びの変化など、様々な要因が考えられる。

しかし、このような様々な社会的要因があろうとも、子どもが育つよりよい環境を整備し、教育を推進していくのが教育現場の大きな役割である。保育園、幼稚園といった幼児期の教育

から、小学校の児童期の教育の在り方にも大きな責任がある。この「小1プロブレム」の問題も、1年生に入学した児童に突然起きる問題ではなく、連続した子どもの成長の過程で、環境の変化から表出した問題であり、そうなる前の段階と、それを受けてからの後の段階のそれぞれの教育のあり方に注目して考察していく。

## 1 子どもの実態

子どもの発達状況に即したしつけを行っていない保護者が増えていることから、食事、排泄、衣服の着脱などの身辺自立に遅れが目立つ。やって良いことと悪いことの区別が十分でない。トラブルなど、感情体験を避ける傾向にある。夜遅くまで起きていて、生活リズムが大人化し活動に集中できない要因になっている。テレビ番組やゲームなど疑似体験が多くなり幼児期に大切な子ども同士で作り出す遊びや自然の中での遊びが減少している。兄弟姉妹が少なく親戚や近所の人との関わりも減少し、子ども同士が集団で遊ぶ機会も減少し、社会性を身につける機会が少なくなっている。これは、幼児教育に携わる現場教師が、日常の保育の中で感じる幼児の生活上の問題点を洗い出した主な意見である。これらのことは幼児期に限ったことではなく、小学校、中学校といった学校段階でも、児童・生徒の問題行動へと発展している。基本的な生活習慣の乱れから、学習意欲の低下、不登校といった問題へ、規範意識の低下からいじめや暴力行為へと発展している。このような問題は、今関心を集めている学力の低下にもつながっている。

このような実態を踏まえ、教育基本法で幼児・児童期の教育の重要性も強調され、平成20年には幼稚園教育要領、保育所保育指針が改定されると共に、小学校の学習指導要領も改訂された。幼稚園・保育園と小学校との接続期に今起きている問題に着目し、就学前教育だけでなく就学後教育のあり方について考察を加えることは、幼児・児童期の教育を円滑に推進するために重要なことと考える。

## 2 心理的な側面

幼児期から児童期へと子どもは連続的な時間の流れの中で非連続な発達の節目を経験する。ピアジェの発達段階論で言えば「前操作段階」から「具体的操作段階」へと移行する時期であり、人格発達においても大きく変わろうとしている。そのような節目の時期に、学校教育のスタートという社会的制度の移行が重なるのは、危機の増幅でもある。

入学を控えた小学1年生の心を歌った歌が2曲ある。ランドセルを背負った「ピカピカ」の1年生は、周囲の大人からみた1年生の姿であり、実際の子どもの心は「ドキドキ」の1年生なのである。学校は勉強をするところと大人から聞かされても、具体的に何をするのかはわからない、ただ大変なことが始まりそうだと感じている、小さな集団から大きな新しい集団の中へ、友達何人できるかな、と不安を募らせている。<sup>(1)</sup>

そのような子どもたちが、現実の学校生活に直面する。これまで親や先生が細かく手をかけてくれたのに、突然自分一人で登校させられ、学校の先生からはあれこれ指示されるが、それも自分一人で理解し行動しなければならない。教科書のいっぱい詰まったランドセルを背負っ

た後ろ姿は不安でいっぱいである。

### 3 教師の指導の在り方

このような社会や子どもの変化に対応してこなかった幼稚園や保育園、学校にも問題はあ  
る。高年齢化が進む教師は、これまでの経験から〇歳児はこうだ、〇年生はこうだ、と過去の  
経験に固執し、時代と共に変わる子どもの状況を受け入れるための努力を怠った。変化した子  
どもたちが、これまでの経験則の上に指導しようとする教師の前で、不適応状況を起こす姿を  
目の当たりにして、なすすべもなく、これまでの育ち方へののみ目をやり、自らの問題に目を向  
けようとしなない教師がいる。

「小1プロブレム」の対応として、今就学前教育の重要性が叫ばれ様々な地区で小学校教育へ  
のスムーズな接続のために幼稚園や保育園の保育はどうあるべきかの検討が多くなされている  
が、小学校現場の対応、すなわち就学後の対応が検討されることはあまりない。

このような問題が表面化してきている中、各自治体は、幼保小の接続のあり方に注目し研究  
活動を進めている。平成21年度の東京都公立小学校を対象に行ったアンケート調査による  
と、幼稚園・保育園教師と小学校教師の連携交流を行っていると答えている教師は46.6パ  
ーセントと<sup>(2)</sup>、多くの教師が連携しているにもかかわらず、同じく文部科学省がなかなか教育  
課程上の接続が行われないことを受け、調査で「教育課程上の接続のための取り組みが行われ  
ていないのはなぜか」の問いに、52パーセントの教師が「幼稚園と小学校の教育課程の接続  
関係がわからない」と答えている<sup>(3)</sup>。このことから、内容に関わる接続のための前段階である  
教育内容の理解ができていないことがわかる。

ここであえて、就学前後教育としたのは、前段階に問題の責任を転嫁しがちな現場体質に警  
告を発し、受け入れた後の対応の仕方にも注目するためである。

## II スムーズな接続のための方途

### 1 就学前後教育で育てたい力

「小学生になるのだから〇〇をしておかなければならない」「小学生になったのだから〇〇が  
できて当たり前」子どもの置かれている状況や、発達の過程を無視して、学校の論理だけで「小  
学生はこうあるべき」「小学校ではこうしなければならない」と大人の論理が見え隠れする。小  
学校入学前に行われる保護者対象の入学説明会でも「これだけは身に付けさせておいてくださ  
い」といった基本的な生活習慣をあげて要求することが多く、より具体的であるため、逆に保護  
者へのプレッシャーになっていることが多い。

子どもには成長の過程でそれぞれに発達課題があり、エリクソンの発達段階説によれば、幼  
児後期には積極性と罪悪感が、児童期には社会性や道徳性があげられている。単に就学のため  
の準備教育、入門教育という位置づけで取り組むとしたら、幼児、児童期固有の発達課題を見  
失う危険性がある。当然成長過程の環境や個人差は認識する必要があるが、そのことをふま  
えた上で小学校就学前後の教育、育てるべき力を考える必要がある。私は、育てるべき力として

「自尊感情」「善悪の判断力」「コミュニケーション力」「忍耐力」の4つの力を育てることに力を注ぐべきと考える。

#### (1) 自尊感情を育てる

自分に自信がないと人に優しくなれない、学校が抱える大きな課題「いじめ」「不登校」といった問題も、子どもの自尊感情、自己肯定感が育っていないことに起因する。我が国の子どもは自尊感情が低いことは様々な統計で明らかになっている。平成20年の日本青少年研究所の調査によると、「自分はだめな人間だと思うか」の質問に「そう思う」「まあそう思う」と答えた中学生が、米国14%、中国12%に対し、我が国は57%であった。年齢別の調査でも、「自分のことが好きか」との質問に、小学校1、2年生でも16%の児童が否定的な回答をしている<sup>(4)</sup>。

自尊感情を持つこと、自己を肯定的に見ることは、物事に積極的に取り組む姿勢が生まれ、新しい環境にも前向きに適応する力となる。就学前後教育においても、この自尊感情を育てる事に力を注ぐ必要がある。

##### ①就学前の教育

幼児期は生活経験を豊かにして、認知能力を養い自らの発達に確信を深めていくことが尊重されるべき時期だ。そしてその発達が、教師や親から認められることにより、自信に繋がりが、自己効力感、自尊感情へと繋がっていく。

ある幼稚園では「トライチャレンジ」と称して、園内の遊具を使って技に挑戦させたり、野菜を育てさせるなど、自分で目標を設定させ、それに段階を設定し挑戦させる取り組みを行っている。できたときには、教師や友人からも賞賛される。また、長期の休業中には、各家庭で課題を設定してもらい、新学期に保護者からその達成度が園に伝えられるようにし、園全体で賞賛するようにしていた<sup>(5)</sup>。

一人一人の幼児にあった目標設定をさせ、目標に向かって努力し達成する喜びを持つ場面を園でも家庭でも多く設定し達成させる。一つできたという喜びは、新たな目標を生み内発的な動機付けとなり、小学校への意向に当たっても前向きに取り組む力となる。

##### ②就学後の教育

小学校という新しい環境の中で、多くの児童はこれまで積み上げてきた経験や自信とそれが通用するかどうか不安が交錯している。そのような状況の中で、教師や友人に、自己が否定されたのでは一気に自信は崩れてしまう。小学校では、これをしなさい、あれをしなさいと指示を出すだけですませるのではなく、幼児教育の現場がやっている環境を整える努力も必要である。

教師も自尊感情をくすぐるような場作りや言葉かけをすることで行動も安定する。「1年生なのだから」ではなく「さすが1年生」といった声かけをする。着席、話しの聴き方といった基本的学習習慣も、子どもを認め励ます声かけを心がけることで定着を図る。発達段階からまだ集団としての意識は十分育っていない。「みんな、すごいね」ではなく「〇〇さんす

ごいね」と個別に声をかけることで一人一人の自尊感情が育つ。

## (2) 善悪の判断力を育てる

小学校で学級が荒れて教師のコントロールが効かなくなる、いわゆる「学級崩壊」は、低学年の場合と高学年の場合とでは、児童の状況は全く異なる。高学年の場合は担任教師との不適応によって起きることが多く、児童は悪いことをしているとわかりながら反抗的態度を取る。それに対して、低学年の場合には、悪いことをしているという意識はなく自分の感情のままに勝手な行動を取っているだけである。その証拠に、高学年の場合には、担任教師以外の教師が指導するとそれに従うのに対し、低学年の場合にはどの教師が指導しようが変わらず勝手な行動をする。

教室で授業中は席を離れてはいけない、先生が話しをしているときは黙って聞くといった当たり前と思われているルールが理解できていないことがある。学校では授業中といった場面が特化されるが、他の場面でも集団でのルールとして身に付けていれば小学校に入学してもそれは同じ場面として意識される。集団で行動するときは個人の勝手気ままな行動は許されないことを、幼児期から身に付けさせる必要がある。最近、子どもを叱らない、叱れないといった一部の親が社会問題化している。良いことは良い、悪いことは悪いと毅然とした態度が大人に求められる。

### ①就学前の教育

保育園の保母が、年少の子に意地悪をした年長の子の両手を握り涙を一杯ためた目を見て厳しく指導をしている。その時ばかりは周りの子を横に置いてでも、その子が納得するまで真剣に向き合う保母の姿があった。普段は優しい先生だがこの時は普段と違う、この子はこのような場面を通して先生として認知していくのだ。

集団生活の中では他に迷惑をかけない、約束は守る、正義が通る、それが楽しいことや生活の充実につながるのだと言うことを徹底して指導する。守れない者がいれば、その場で厳しく指導する指導者の毅然とした態度が必要だ。そして、それが楽しさに繋がった時はみんなで認め合い喜び合いたい。

### ②就学後の教育

「鉄は熱いうちに打て」入学した段階で集団のルールが守れない児童がいたらその場ですぐ指導する。親の目など気にすることなく、教師はリーダーであること、基本的な約束を決める立場にあることを、その児童のみならず学級集団全体に伝える。最初の段階できちんとルールを教え行動を変えさせておかないと、それを見ていた児童がそれをやっても大丈夫なのだ判断し、同じような行動をとる子が出てだんだん收拾がつかなくなる。

児童の主体性を尊重するといった指導理念の元、子どもの行動をできるだけ規制しないようにするといった誤った指導理念を持った教師がいる。そのような教師が指導に当たると学級はコントロールが効かなくなる。集団のルールが守られた上での自主性であり、あくまでも自由にできる範囲は決まっている。小学校入学後も、やって良いこと、いけないことをし



っかりと教えるメリハリのある指導が求められる。

### (3) コミュニケーションする力を育てる。

社会状況の変化と共に、人との関わる機会が少なくなっている。それは子どもばかりでなく、親も同様である。はっきりと自分お気持ちを言葉で伝えられない、人の話が聞けない、相手の目が見られない、集団遊びができないといった、幼児・児童を散見する。

様々な形で人と関わりコミュニケーションを取ることは、相手の気持ちを理解し、円滑な関わりを生み心の豊かさと安定を生む。豊かな人間関係を作るためにも、できるだけ多く人と関わる機会を多くする。このことは、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てると共に、自主、自立および協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培う。保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領にも、共通に示されている。

#### ①就学前の教育

コミュニケーション力を培うには、まず教師と子どもとの信頼関係、そして互いに認めあえる集団の中に生まれる。教師は幼児の思いを受け止め、集団にそれぞれの違った思いを伝えあい、思いをつなぎ深める役割を果たす。そして幼児が思いを相手にわかるように伝えられるよう、全体の前で話す機会、人の話を聞く機会を多く設定する。

集団での遊びを通して、何でも言い合える関係、相手に思いを伝えられる話す力、発想を広げ関係を豊かにするための語彙力、集中して人の話を聞く機会などを多くする。大きな声ではっきりと、自分の意志を言葉で伝える機会を多く作る。絵本の読み聞かせ、集会での司会役、ルールのあるゲーム遊びなど積極的に取り入れる。小学校で行っているゲームや行事などを模倣することも効果的である。

#### ②就学後の教育

児童のトラブルの原因の多くは、自分の思いが相手にうまく伝えられない、伝わらないことに起因する。それは、話し聞く力の弱さ、語彙の不足がある。新教育課程においても、重点項目として「言語活動の充実」があげられている。人間関係作りに欠かせない言語活動の力の育成を学校教育全体を通して行っていくとの考えだ。

幼稚園や保育園でつけてきた力をきちんと把握し、言葉を使って活動する場面を多くする。少人数での話し合い、全体の前で話をする機会、学級活動などの集団活動、落ち着いた雰囲気の中で話に聞き入る機会、思わず話したくなるような学習活動の設定、音読や朗読など大きな声ではっきりと言葉で表現する場の設定、できたことを認める教師の励ましの場、入学当初からこのような場面を設定することで、他とコミュニケーションをとり関係作りを行うための大きな力へと育つ。

### (4) 忍耐力を育てる

最近、オモチャ売り場などで「買って、買って」とだだをこねる子どもをあまり見かけなくなった。経済的に豊かになり、大人も子どもに騒がれるよりは買い与えた方が楽だと発想がある。「腹減った」という子どももいなくなった。腹が減る前に十分すぎるほどの食料が目の前

にある。「おいしい」と言って目を輝かせて食事をする子どもも減っている。衣食住すべて満たされて育つ子どもたちに耐える力を育てるのは困難である。

日常の中で我慢することの必要のない生活をしてきている子どもには、学校という集団の中で我慢させられることは、あまり経験のないことで、厳しい状況となる。幼稚園・保育園の時期から小学校へと、集団生活の中でこの力を継続してつけていく必要がある。

### ①就学前の教育

集団ではみんなが楽しく生活するためのルールがあり、一人のわがままな要求は通らないことをはじめにしっかりと、発達に応じて植え付ける。安易な妥協はせず徹底して自分勝手を通さない、継続して通さない、誰に対しても同じ姿勢で当たる、園全体の大人が同じ対応をすることで、この集団にはルールがあるということを態度で示す。

制作活動等では、安易に完成する物ではなく苦労して作り上げる体験を多くする。個人で投げ出してしまうと人が困る体験という意味では共同制作で大物を作りあげる体験も貴重である。運動でできないことに挑戦させたり、植物の栽培で収穫の喜びを知らせるなど、家庭とは違う園でしかできない力を合わせて継続して取り組む活動をさせる。

### ②就学後の教育

就学前の教育同様、一人のわがままは絶対に許さないという毅然とした態度が必要だ。一人のわがままに対して甘い対応をすると必ず同じような行動をとる児童が現れる。これが二人三人と増え、学級集団全体が乱れ、荒れてしまうケースである。

一方、我慢し頑張る児童は認め励ます。児童は、誰でも教師に認められたいという願いもっている。同じように行動できた児童は、すべて一人一人認める。学級集団でみんなで力を合わせて一つのことをやり遂げる学習活動を取り入れ、粘り強く頑張った体験をさせる。じっくりと落ち着いて話を聞き、想像を膨らませることの楽しさも味わわせたい。

## 2 就学前後教育の充実を目指して

これまで述べた「自尊感情」「善悪の判断力」「コミュニケーション力」「忍耐力」を就学期の子どもたちにつけるためには、幼稚園や保育園、学校がどのように環境を整備し、組織的に動くか考察することが大切である。これまでこの接続期の問題は、幼稚園・保育園、学校、保護者とそれぞれが責任転嫁し、責任の所在がはっきりしないまま議論が進められてきた。

本題からは外れるが、これは幼保小の接続の問題だけでなく、小中の接続の問題にも当てはまることである。この問題は「中1ギャップ」として、中学に入学してきた子どもたちが中学校生活に不適應を起こし、不登校になる生徒の数が急増することから問題視されている。この問題でも、中学校教師は、中学校に入学するための指導ができていないと小学校側を非難し、小学校教師は、小学校での育ちが生かされていないと嘆く。

「小1プロブレム」の対応も同様であり、それぞれの立場で相手を非難したところで問題の解決にはつながらない。それぞれがお互いに問題の所在を明らかにし、改善に向けて連携協力し

て解決に当たることが必要である。

#### (1) 「要録」を生かした情報提供

小学校との連携を意識して、保育所には「保育所児童保育要録」を小学校へ送付することが義務づけられた。また、幼稚園においては「幼稚園幼児指導要録抄本」を送付することになっている。このことから、これまで以上に、幼稚園や保育園での児童の育ちの状況を客観的にとらえた資料として役立てることができる。

これまでは、小学校では様々な施設から児童が入学してくるため、全く情報がなかったり、口頭での引き継ぎのため客観的で正確な情報は伝わりにくかった。就学時健康診断での面接や診断・調査では、大きな疾病や障害はつかめても、行動や性向まではつかめなかった。まだ「要録」はスタートしたばかりであり、その記載内容や方法については今後の研究を待つところであるが、学習評価の観点をもって客観的なデータを提供するようにしたい。「人との関わりについては、何ができた何ができないのか」「我慢強く取り組む力はあるのか、具体的にどんな場面で」と言った情報を共有できるような物としたい。評価の観点から言えば、小学校側からすれば診断的評価となり、幼稚園・保育園にとっては総括的評価となるはずである。

#### (2) 園・学校の組織的な連携と対応

幼稚園・保育園、小学校とも学級担任制をとっているため、幼児・児童の情報が担任だけで把握処理されることが多く、園や学校が組織として対応するときの大きな障害になることがある。「小1 プロブレム」の問題にしても、学級が収拾つかなくなるまで、学校の管理職は問題を把握していなかった例や、かなりの問題行動があったにもかかわらず園全体の問題とならずに小学校に引き継ぎ情報を提供していなかったなどの例がある。

「善悪の判断」一つ取り上げても、全職員の共通理解と共通実践が必要である。幼児、児童の問題行動に関しても組織全体で情報を共有し、組織的に解決のための方策を検討する。各学校特別支援コーディネーターがおかれ、特別支援委員会が組織されている。まだ学校によって対応には温度差があるが、学級全体の状況に関する問題にも積極的に関わらねばならない。どのような組織でもよい、担任一人で抱え込むのではなく、様々な立場の者が、何らかの形で関わることで新たな展開を生む。

学級担任とは便宜上たまたまおいた者で、学級に関するすべてに権限と責任を持っているわけではない。柔軟に考え、問題が起きたときには学級を解体することもあり得る。幼稚園・保育園では複数の担任が入って指導に当たることもある。学年という大きな組織で授業も行い、問題を解決した事例もある。

#### (3) 保護者・地域との連携

「モンスターペアレント」などという言葉が出るほど、学校と保護者の関係は今まで以上にぎくしゃくしており、学校・園は必要以上に保護者の目を意識している。しかし、ほとんどの保護者は学校や教師に対し信頼を寄せている。様々な調査で学校の信頼度について聞くと、一般を対象にしたものでは信頼度は高くないが、保護者に限定して聞くと信頼度は高くなる。



様々な幼児・児童の問題行動の原因は家庭にあることが多い。しかし、保護者はそれに気づかなかつたり放置しているわけではなく悩んでいるのである。問題行動を非難するような教師の姿勢では、親は悩みを深くするばかりでたくなになり問題の解決にはつながらない。幼稚園や保育園では、保護者と教師が接触し情報交換をする機会が毎日ある。小学校に入学したとたん、敷居が高くなり、保護者と教師の距離も遠くなる。

保護者同士のつながりも幼稚園や保育園では、日々顔を合わせているのでつながりが強い。お互いに子育ての悩みを出し合い、問題を消化している。PTAの役員が中心となり学級の保護者をまとめているケースもある。学校においても、PTA等保護者組織を活用して問題の解決に当たりたい。それには、教師が保護者に近づき人間関係を作りあげる努力が必要だ。PTAの活動にも積極的に参加し、関係を作れば、子どもの問題行動にも協働的に取り組み、お互い問題として解決に取り組める。

### Ⅲ 教師、教員養成への期待

この困難な状況を抱える幼稚園や保育園から小学校への接続期の幼児、児童に「自尊感情」「善悪の判断力」「コミュニケーション力」「忍耐力」といった力をつけるために、教師は何をすべきか、これから教師になろうとする者にどんな力を身に付けさせるべきなのだろうかを考える。

#### (1) 子どもの発達の理解

小学校教師は、保育園や幼稚園で児童がどのような方法でどんな力を身に付けてきているかをほとんど知らない。これは、保育園や幼稚園の教師や中学校の教師にも言えることで、他校種のことについて知る機会がほとんどない。子どもの発達が連続しているにもかかわらず、3年から6年という狭いスパンでしか子どもの発達を見ていない。特に、他校種から入学してきたばかりの児童生徒の発達段階についての理解が弱い。

学校現場では、最近近隣校園との交流が活発になりつつあるが、幼児児童だけの交流ではなく、教師が積極的に交流し意見交換を行ったり、授業を交換したりする機会を増やす必要がある。また、教員養成においても、自分の専門とする校種以外の園や学校について学ぶ機会や参加実習を組み入れたい。

#### (2) 学級集団作り

幼稚園や保育園では時間に拘束されることはほとんどなかったが、小学校では45分間席について教師の話を聞いていなければならないという、急激な環境の変化に対応しなければならない。個々では学級という集団が形成され、子どもはそこから離脱することは許されない。入学したばかりの児童は、この学級集団に適応しその集団の規範を身に付けなければならない。その集団を指導、統率するのが担任教師である。教師は、子どもの個性や発達だけでなく、学級集団の特性を理解し集団作りを行っていくことが求められる。

学級集団そのものはフォーマルグループであるが、その中で形成されるインフォーマルグル

ープが集団に大きな影響を与えるようになる。初期の段階で、このインフォーマルグループに影響力を持つフォーマルリーダーに教師はならなければならない。自分の所属する集団は窮屈であるけれども、集団ならではの楽しさがあるということ、個々の集団成員一人一人に持たせるための技術、集団心理への理解やグループエンカウンターなどの技術を身に付ける努力をさせたい。

### (3) 柔軟な対応力

教育現場では、この「小1プロブレム」だけではなく日々困難な課題への対応の連続である。そのような危機に対応するとき、ステレオタイプなものの見方しかできない場合は、行き詰まり解決できなくなる。教師に必要なのはIQ（知的能力）よりもEQ（対人関係能力）なのである。様々な角度から問題を分析し、様々な解決策が考えられる。子どもの対応においても一面的な対応ではなく、様々な角度から子どもの状況を分析し、問題もあるがよさもあるといった視点がもてる教師が求められる。

そのためには、自分の学級、自分の担任する子どもだけにのめり込むのではなく、同じ学年、同じ学校や園の仲間と連携すること、保護者、地域、他校園、別の社会の友人と広いネットワークを持つこと、様々なことに関心を持ち、情報収集に努めるような人材を育成することが必要である。

### 〈おわりに〉

本稿では、幼稚園、保育園から小学校への接続期に幼児・児童に必要な力は何か、そのために何をすべきかを中心に述べてきた。このことは今日の我が国の教育現場の抱える問題から考えても、この時期に限らず幼少年期の幼児・児童・生徒に共通して身につけさせたい力でもある。

教師はとにかく何か問題が起きると、その状況を十分把握せず他に責任転嫁して問題を片付けようとする傾向がある。まず、自分たちの問題としてとらえた上で、その問題に関わるすべての人と連携する、そのための広いネットワークと情報を持つべきである。

### 【注】

- (1) 心理科学研究会編『小学生の生活と心の発達』（福村出版、2009）p25
- (2) 東京都教育委員会調査『小1問題に対応するために』2009
- (3) 文部科学省調査『幼少の教育課程上の接続について』2009
- (4) 日本青少年研究所調査『中学生・高校生の生活と意識調査』2008
- (5) 台東区立育英幼稚園『研究紀要』2009 p5